

## 発達障害大学生への小集団による心理教育的アプローチ

水野薫 1)、西村優紀美 1) 2)

1) 富山大学学生支援センター

2) 富山大学保健管理センター

Psycho-Educational Approach for University Students with Developmental Disorders in a Small Group Setting

Kaoru Mizuno (Student Support Center, University of Toyama)

Yukimi Nishimura (Center for Health Care and Human Sciences Student Support Center, University of Toyama)

### 1 はじめに

富山大学学生支援センター、アクセシビリティ・コミュニケーション支援室、トータルコミュニケーション部門（略称：トータルコミュニケーション支援室）では、社会的コミュニケーションに困難さをもつ発達障害学生を対象に、コミュニケーションサポートを行っている。個別の面談における支援者との対話を通して、学生自身が自己の行動を振り返り、起こっている問題を理解し、その状況における困難や問題が少しでも解決していき、ことや自己肯定感をもって自分を認識できることを目指している。このような個別面談における、心理教育的アプローチの成果については、『発達障害大学生支援への挑戦』第5章（西村、2010）に、詳しく記述されている。

支援者との、丁寧な対話の中で、学生は次第に自らについて語り自己を見つめるようになっていく。しかし一方で、支援室に通う学生の多くは、「同世代の仲間と会話できるようになりたい」「人数が多くなると、どのように会話に参加すればよいかわからなくなる」という思いを持っている。そこで、支援室では、平成22年6月より、小集団によるコミュニケーション活動の場「ランチラボ」を企画してきた。ここでは、平成23年1月末までに計10回行われた本活動を振り返り、小集団によ

る心理教育的アプローチのありかたについて検討したい。

### 2 「ランチラボ」活動の概要

#### (1) 実施日

平成22年6月～平成23年1月、毎月隔週水曜日の昼休みに計10回行った。

（第1回5月26日、第2回6月23日、第3回7月7日、第4回7月28日、第5回10月27日、第6回11月10日、第7回11月24日、第8回12月15日、第9回12月22日、第10回1月12日）

#### (2) 参加者

学生	A子…自閉症スペクトラム（以下ASD）（未診断）
	B子…ASD（未診断）
	C子…アスペルガー症候群（以下AS）（診断あり）
	注意欠如・多動性障害（以下ADHD）（未診断）
	D男…ASD疑診（第5回から参加）
支援者	第1回～4回…3名（内1名は事務スタッフ）
	第5回 …4名
	第8回～ …5名

#### (3) 場所

トータルコミュニケーション支援室・活動室

(4) 活動の流れ

- ①各自準備した昼食を食べながら雑談する。
- ②ラボトークを開始する。あらかじめテーマ(話題)をカードに書いて準備する。  
例えば…好きな色や食べ物・昨日見た夢・憧れのタイプ…等
- ③一人がカードをめくり、そのテーマについて話をする。
- ④一人の話が終わったら、質問や意見を自由に述べ合う。
- ⑤同じテーマについて、参加者全員が順に話をする。
- ⑥3～5を数回繰り返す。

(5) 配慮したこと

- ①参加学生が安心感や充実感をもち、会話を促進するために、個人面談の中で語られる本人の興味をテーマに盛り込む。
- ②参加者全員に「話す」機会を保障するために、一つのテーマについて必ず全員が話すようにする。
- ③学生同士の意見交換が自然に成り立つよう、支援者が会話をつなぐ役目を果たすように心がける。
- ④支援者は、テーマにそって自分のことを語るとともに、人の発言に対して積極的に質問や意見を言ったり相槌をうったりし、学生にとって「話す・聞くモデル」となるようにする。
- ⑤学生の主体的な参加姿勢をより促進するために、学生の希望や要望をラボトークの企画に随時積極的に取り入れていく。

(6) 各回のテーマ

第1回・2回は、個人面談での発言から、A子、B子、C子が興味をもちそうだと思うことや話しやすそうだと思うことを話題に選んだ。

- 第1回…①何かをやりたくないと思ったらどうしますか?  
②子どもの頃どんな遊びをしましたか?

か?

③がんばったと思うのはどんなとき?

第2回…①好きな色は?

②一番恥ずかしかった失敗談をきかせてください

③自由な時間があつたらなにをしますか?

④憧れの人はどんなタイプ?

個別の面談で、ラボの振り返りを行うようにし、話題にしてみたいことを尋ねて、カードに書くテーマに取り入れるようにした。

第3回…①昨日のラッキーアンラッキー

②あなたのストレス解消法を教えてください

③夢の話

第4回…①自分の一番好きなのところは?

②ここ最近でキレたことは?

③子どものころお気に入りの童話は? その理由も聞かせてください

第5回…①本日の当たり目(カードを選んだ人がテーマを決める権利がある)

このカードをひいたD男が決めたテーマは、最近好きな映画トップ3

②自分を動物に例えると?

第6回…①夏と冬、どちらが好きですか?

②生まれ変わつたらなにになりたいですか?

③願い事が一つだけかなうとしたら

第7回…①好きなスイーツは?

②一番うれしかったできごとは?

第8回…①自由な時間があつたらなにをしますか?

②本日の当たり目

カードをひいた支援者4が決めたテーマは、好きな色と理由

第9回…①今年のナンバー1エピソード

②今年見つけたすげえもの

第10回…①血液型は何型?それにまつわるエピソード

②年末年始のトピックをひとつ

## 3 「ランチラボ」の実際

## (1) 第I期(第1回~2回)

A子、B子、C子は、それぞれ異なったキャンパスの学生であり、第1回の活動日が初対面であったので、大変緊張していた。特に、A子とB子は、4年生で就職活動に取り組んだのだが上手いかず、その原因が「うまく話せない」という意識があった。だからこそ「会話が上手になりたい」という意欲を強く持って参加していたのだが、それだけに不安も大きかった。そこで、この時期は、支援者は個別面談の時と雰囲気を意識的に変え、学生と同じ目線で会話を楽しみ、自らのことを気さくに話すことを心がけ、誰もが安心して話せる雰囲気作りを大切にしたい。

第2回、「恥ずかしかった体験談」というテーマがあった。支援者は口々に、自身が学生の頃の体験談を、笑いを交えながら楽しく語った。そのことを、B子は、以下のように感想文に書いて支援室に持ってきてくれた。

B子「失敗談では、パンツネタ盛り上がりましたね。先生方が、思い切りぶっちゃけた話をしたから、みんな話しやすくなりました。人数や時間、椅子の配置は適当だったと思います。提案は、夢ネタ、買い物話、旅行に行くなら？、ひやとした出来事、一番うれしかった出来事または言葉、ストレス解消法などテーマにあるとよいと思います。」

同じく第2回、「自由な時間があったら何をしますか？」というテーマがあった。ここでのやりとりに、学生たちの特徴的な姿があらわれているシーンがあった。

………中略………

C子：まあ 基本的に留年してヒマなんです。講義も午前のしか落としてなくて、昼には帰れるし。最近、昼になったら、〇〇ビル4階のファミレス行って、昼間からワイン飲んで「うへ〜」とか言っま

すけど。

一同：(大笑い)

A子：(目を大きく開き、顔は真っ赤。笑いをこらえる。)

B子：(目を大きく開き口をすぼめ、驚いたような表情。)

支2：おおうけ！ 今の笑いは、みんな(A子B子C子見る)いいなあって感じ？

支1：(笑いながら)A子さんも！

A子：(笑いながら驚きを隠せない表情。口元を手で押さえる。)

支3：ちょっとびっくりしてるかな？

支2：いいんだよ、質問して。

A子：お酒つよいんですか？

C子：あんまり強くない！で、翌日は体調悪くなる。それで、ツイッターなんかで“一人〇〇〇楽しすぎるぜ”とか書いてみたりする。

支2：反響はありますか？

C子：さあ…ダメ人間とは言われます。

支2：でも、C子さんはもう20歳になってるもんね。

C子：うん！！ほ〜ほ〜 (うれしそうに笑う。)

支1：すごいねえ

B子：(笑いをこらえきれず、プツと吹き出す。)

支2：B子さん、今のプツは？

支3：同じって？

B子：いやあ、昼間からっていうのに驚いて！

C子：ひどい時には、席にアニメ雑誌広げて飲んだくれている時もありますから。

支2：ワイン飲むと気持ちが楽になったりするの？

C子：いや、単においしいから飲んでるだけで。酔っ払っても酔ってなくてもそんなに性格変わらない。そして母には「生きていて恥ずかしくないのか」と言われる。(笑う)

支1：変わらないんだ？ お酒飲んでも飲まなくてもこんな感じ？

C子：こんな感じって？

一同：大笑い

A子：お酒強い～！

C子：強いんじゃないんですよ、体調崩すんですよね。

……………以降略……………

C子は、話すことが好きで、個別面談でも自分のことや見聞きしたことについての感想や意見などもきちんと話すタイプである。しかし、母親の話では、それなりにC子のお世話を焼いてくれる同級生はいるが、同等に話せる友達はいないということだった。本人も、自分はいたってまじめにやっているのだが、なぜか周囲を怒らせてしまうことがあるという自分の特徴や自分が引き起こしてしまう困った状態をそれなりに自覚しているようで、それは仕方がないことだと半ばあきらめに近いようなことを言っていた。しかし、ラボでのC子は、実に生き生きとしていて、自分が話し始めた話題であれば、ずっと話題からそれずに会話を続けることができている。自分が提供した話題にみんなが盛り上がるのが楽しそうである。普段は、ツイッターなどオンラインでの会話を楽しんでいるC子だが、このような生の会話の雰囲気も望んでいるのだということがわかる。

B子は、人と接することや話すことに、強い苦手意識をもっており、それをなんとか改善・克服したいと思っている。個別面談を開始した2009年5月ごろは、支援者からの質問にどうこたえてよいかわからなくなると、涙がこぼれてしまうという状況であった。人が話しているのを聞いているのは楽しいが、話そうとすると声が出ないとも言っていた。ゼミなどの集団の場では、人の会話に入ることはほとんどなく、必要な質問もできないまま困っているという状況もしばしば見られた。しかし、ラボでの様子をよく観察していると、独特の表情の変化により、感情の動きがあることは見て取れた。

そこで、支援者が、感じたことを言葉で表現してみるよう促すと、話題からそれずに的確な

発言をした。表情は乏しいからといって、人の話に興味がないのではなく、どのタイミングでどんな言葉にすればよいかわからないということがよくわかる。

## (2) 第Ⅱ期 (第3回～4回)

A子もB子も、「会話が上手になりたい」という明確な意識を持って参加しており、個別面談での振り返りでは、他の2名の学生や支援者の様子をよい手本にしたり、比較したりしながら、自分の課題を整理して次回に参加するようになった。B子は、「もっと、自分から話題を振ることができるようにしたい。支援者3に、自分の弁当箱のことを尋ねられてとてもうれしかったから。自分もそういうことができるようになりたい。」と語り、自ら実行に移す努力をする様子が見て取れた。また、A子からは、「公務員試験の集団面接が不安だから練習をしたい」と要望があり、緊急ラボと称して集団面接を仮定した場を設定した。ラボを数回体験する中で、「自分は全く話せないわけではない」という実感をもったA子は、緊張しながらも自分の考えをまとめながら話すことができた。

一方C子は、もともと話すことが好きなタイプでもあり、A子B子に対してどことなく優越感のようなものを感じているようだった。だからといって、A子やB子に差別的な態度をとることは全くなく、自分が語るということを楽しんでいたが、C子の特徴を顕著に表している場面も見られた。

……………中略……………

支2：今日はA子さんとB子さんのリクエストが入っています。

B子：(カードを引く)

支1：今日のラッキーアンラッキー

支2：ちょうどB子さんのリクエストだね！

……………途中略……………

支2：B子さんはどう？

B子：ラッキーだったのは弁当をつくってもらえたことで…

支一同：あ～そうだねえ

B子：アンラッキーだったのは、日焼け止めを塗ろうとしたのですが、このあたり（太ももの辺りを指差す）に落ちてしまって、洗うのに時間がかかってしまって…

（照れたように笑う。）

一同：あら～（笑いも起こる）

支1：服の上におちたん？

B子：手の上にとったのが、ぺたっと落ちたんです。

支1：クリームやね？

支2：みんな日焼け止め塗ってるの？

A子：基本長袖だから塗らない

支2：あ～そうか。C子さんは？

C子：ん～ラッキーなことあったかなあ？

支1：ん？

支2：日焼け止め塗ってる？

C子：ん？

支2：日焼け止めぬってますか？

C子：一応塗ってますよ。ラッキーなことねえ…（と話し始める）

………後略………

C子は、ラボの形式をよく理解しており、カードに書かれたテーマは意識しているのだが、人が話している時もずっとそのテーマについて考えているようで、その時々のお話の流れにはついていっておらず、とんちんかんな答えをしている。授業中先生の話に集中しきれなかったり、悪気がないのに友達を怒らせてしまうことがあるということ、思い出させるシーンである。しかし、よく考えてみると、支援者2が「みんな日焼け止め塗ってる？」と投げかけたことは、本来のテーマから外れた、イレギュラーな展開である。人との会話の中で起こりがちなこのような場面は、C子たちが「空気を読めない」のではなく、むしろ周りが話題を自分の興味に合わせていろいろな方向へ変えてしまうために生じるズレのようにも思える。

一方、A子は、「自分は会話が苦手」だと感じ、「研究室では同級生の会話に入って行けな

い」ことが悩みである。しかし、先に述べたようなイレギュラーな展開には会話十分ついてきており、的外れな答えをすることはない。聞きもらしなく、理解しながら聞いているのだろう。同級生とのかかわりの場では、話すタイミングが分からなかったり、テンポが速すぎてついていけないのかもしれない。その点、本活動では、それぞれが話すことを待ってもらえ、必ず話すチャンスがある上に、話題を確認してから話し始めることができるので、安心して話せているのだと思われた。

### (3) 第Ⅲ期（第5回～7回）

第5回からは、D男とその個別面談を主に担当している支援者4が参加することとなった。会話を始めた当初は、いわゆる「女子ネタ」を話すには、女子学生ばかりのほうが話しやすいのではないかと考えていたのだが、第4回に支援室に研修にきていた高校の先生（男性）に飛び入り参加をしてもらった際、3名とも性差を意識していないことが、様子からうかがい知ることができた。D男は、C子と似たようなタイプで、とても話好きである。高校生までは、それなりに話すクラスメイトがいたようだが、大学では自分には友達ができないと、母親に話していた。2つのサークルに属しているが、語る相手がいるわけではないようであった。

D男は、参加して早々に、「本日の当たり目」カードをひいた。これは、引いた人がテーマを決めることができるというもので、話題が豊富で話好きなD男にちょうどよい機会となった。D男が考えたのは「最近好きな映画トップ3」で、映画に詳しいD男のトップ3は、他の参加者があまり見ていないものであった。そこで、支援者が「それぞれについて説明してほしい」というと、D男は身振りを交えながら、面白くしかもわかりやすく話してくれた。参加者が口々に「へ～そうなんだ」と感心したり、「それはおもしろいね」「見てみたくなった」と共感したりした。一般に、趣味や興味は共通している

と話が弾むといわれるが、必ずしも興味が一致していなくとも、聞き手が想像力をもち、話し手の話題に興味をもっていれば、十分話は盛り上がる。同級生の中で、ASやASD傾向の人たちがどこかういてしまう印象をもたれやすいのは、彼らが決して会話が嫌いとか語りたくないと思っているのではなく、彼らの話に興味を持ってくれる人が少ないために、話すチャンスが少なくなってしまうのではないかと感じる。

また、ラボの中では、個別面談の中だけではわからなかった、人に気遣いをしたり、助け船を出したりというD男の良いところが随所でみられた。

……中略……

支4：映画3つもいえるかなあ…

D男：3つじゃなくてもいいですよ。僕が3つ言いたかっただけ。

……中略……

支2：（映画の話題の続きで）B子さん、どうですか？

B子：一番最近映画館で観たのは…シャーロックホームズです。

D男：あ～！！それすごく見に行きたかったんですけど、ちょうど同じ時にほかに見たいものがあって見に行けなかったという…

支3：半年前ぐらいじゃないですか？

B子：……

D男：最近といえば最近じゃないですか？

B子：……

D男：シャーロックホームズは実は…（と、ホームズについての豆知識を語る）

支2：B子さん、ミステリーとか推理小説好きですもんね？ どんなどころが楽しかったですか、ホームズは？

B子：……（話はじめに時間がかかる）

D男：あんまりおもしろくなかったっていう感じですか…？

支2：どうかな？ 聞いてみようか。

B子：……（やはりなかなか話し始められない）

D男：映画の内容って、後に残る時と、そうじゃない時がありますよね？

支1：あ～なるほど…

D男：どこが面白かったかと聞かれても、どう答えていいかわからないとか…

支1：（B子に対して）そんな感じする？

B子：（表情は動くがなかなか言葉が出ない）……後略……

B子の代弁のような、D男の発言は、沈黙に耐えられない、または人の発言を待てないADHD傾向の人に特有のせっかちな行動とすることもできる。しかし、全体の流れの中でD男を観察していると、なかなか話せないB子のことを思いやったD男のやさしさだと思える。B子がこの日、普段に増して声が小さくなかなか話せなかったのは、D男と初対面ということも大きな原因の一つであった。第7回（11月24日）、医学部修士課程の学生（心理専攻）がゲスト参加した時にも、この時と同じようにいつも以上に声が小さくなるということあった。後からB子に確認してみると、「初めて顔を合わせる人がいると、すごく緊張します。しかも座り方がその人と90度とかで、視線が自分に向いていると、困ります。」と語った。

D男が加わったことで、会の雰囲気有一段と明るいものになった。また、C子とD男は話題に共通性が多く、自然なやりとりもみられた。会をはじめたときは、話しやすく楽しい雰囲気を作ることを意識していたが、会を重ねる中で、学生同士のやりとりが成立するようになってきていたので、支援者が話しすぎるのはやめることを確認した。また、C子やD男が話すことを尊重しつつも、二人だけのペースになりすぎないよう配慮し、A子やB子に発言を促したり感想を求めたりする場面を意識的に行いたいと考えた。

（4）第IV期（第8回～10回）

第8回から、支援者5（男性）が加わった。支援者5は、経営学が専門で民間の企業で採用担当をした経験があることから、支援室では就職に関する相談を担当することが多い。筋道を立てながらわかりやすく語る支援者5の姿は、参加学生にとって、模範の一つとなった。参加者が増えたこともあり、第10回からは時間を90分に延長して、十分に話せる時間を確保するようにした。

このころから、A子が積極的にコメントしたり、質問したりする場面が増えてきた。支援者だけでなく、D男の会話の仕方も、よい影響を与えているのではないかと思われた。B子も、自分が話したことに反応がないと、「これじゃあまずいですか？」と笑いながら言ったり、自分が読んだ本を「読んだことがある人いますか？」と一同に向かって質問するという場面が見られるようになってきた。

また、カードを用いてのコミュニケーションの場だけでなく、学生同士の影響はいろいろな面に表れた。たとえば、A子もB子も、ラボの日は必ずお化粧をしてくるようになった。面と向かって褒めあうことはないが、あとから必ずA子は「B子さんは化粧が上手」と言っている。B子も、「念入りに化粧をしていてバスに乗り遅れた…（苦笑）」という日があった。また、着ているものや持ち物、弁当の中身について話をすることもあり、いわゆる雑談のようなことも行われている。これらは、ラボトークを始める前の集まったものから昼食を食べる時間にも見られる会話である。

#### 4 授業「トータルコミュニケーション研究」受講学生の自由記述から

2010年度後期、教養学部教養原論として、障害学生のピアサポーター育成も目標にした「トータルコミュニケーション研究」が開講された。支援者1と2は、「障害のある人とのコミュニケーションワークショップ開発」を担当し、その一つとして、「ランチラボ」を授業の中で体験しても

らった。体験後、受講した学生に、体験して感じたことと（支援者、参加者両方の視点から）、カードに書くテーマについて書いてもらった。その内容を以下にまとめる。

##### (1) 支援者として大切なこと

- なかなか話せない人には「〇〇さんはどう？」というように声をかけたり、質問をしたりして、話す機会を作ってあげるようにする。
- 話を途切れさせないように、会話をつなぐような発言をするなどの工夫をする。
- 支援者自身が、思ったことや感じたことを自然に発言することで、ほかの人も言いやすくなる。また、支援者も会話を楽しもうという気持ちで話すことが、リラックスした雰囲気を作り出す。
- 支援者と参加者の境目はなく、みんなで楽しいコミュニケーションの場を作っていこうという気持ちが大切。
- 座る位置など細かいことにも気配りをする。

##### (2) 参加者として感じたこと

- 話している人のほうを見たり、相槌を打ったりすることで、話す人も聞く人も、安心してコミュニケーションを楽しむことができる。
- 聞き手が話し手をせかさず待ったり、共感したりすることで、話し手は焦らず話せる。
- 聞き手は、相手のことを知りたいという気持ちを持つことが大切。そのことで自然と相槌も打てる。

##### (3) テーマや形式について

- カードは、表になっていて、自分が話したいことや話せることを選んで話すほうが気持ち楽だと思う。
- 話すことを思いつかないテーマもあるので、誰でも話せるものがよい。
- 2～3人で話題を変えるなどしてもよいのでは？

上記の学生の自由記述から、小集団におけるコミュニケーションサポートについての重要な考察

が導ける。学生の一人は、自由記述欄に、「これまで、どうしたらコミュニケーションが楽しく続けられるかなど意識したことはなかった。コミュニケーションについて客観的に見つめることができてよかった」と述べた。このことは、非常に重要な視点で、発達障害の人たちのコミュニケーションの問題は、彼ら自身のコミュニケーション能力の低さとして論じられることが多いが、定型発達と言われる人たちのコミュニケーション能力が高いかといえば、決してそうではない。私たち自身が、コミュニケーションが成立する要素を明確にし、意識してかかわることによって、この問題の多くは解決していくのではないかと思うことさえある。実際、授業の中では、複数の学生が、「カードをめくるまでテーマがわからないより、はじめからテーマがわかったほうがよい」「自分の話しやすい話題について話したほうがよい」と書いているのに対し、ランチラボに参加している4名の支援学生からは、そのような意見は聞かれず、話すことが浮かばず話せなくなるということもなかった。このことから、話せる話題に限りがあるのはむしろ定型発達といわれる人たちのほうで、発達障害の人たちはテーマが明確であれば興味がさほどなくても話すことができるということを示している。B子が「研究室での会話についていけない」と悩んでいることに代表されるような発達障害の人たちのコミュニケーションの問題は、「自分が知らない話題で話せない」とか「なにについて話しているのかわからない」ということではなく、むしろ漠然とした世間話のため目的のない会話の意味がわからないということだったり、話に割り込む人がいたり話題を変えてしまう人がいたり、当たり前な会話のルールが意外に守られていないことが原因なのではないだろうかと思える。

## 5 考察とまとめ

(1) 参加した学生のうち2名は、継続的な個別面談を通し、支援者との間では会話が成り立つようになってきたのだが、ゼミの仲間など

同年代の人との会話ができないということが悩みのひとつであった。このような、同じような悩みをもつ仲間による小集団の形成は、支援学生が、自分だけが悩んでいるのではないという安心感をもつことができ、自助グループ的な役割も果たしているといえる。

- (2) 自分の発言が否定されない、そして評価されないという雰囲気は、コミュニケーションに苦手意識をもつ学生が安心して語るために必須条件だと言える。支援者が率先してその雰囲気を作りだしていることを、学生らは敏感に感じ取っており、学生同士が互いの発言を待つことができている。特に、B子は4人の中で最も話すことに抵抗があり、話し始めるまでに時間を要することがたびたびあるが、その沈黙の時間をいやな顔せずにB子が話すまでじっくり待ったり、時には助け船を出したりと人間味を感じる対応をすることができている。「発達障害の人は場の空気が読めない」とよく言われたりするが、ラボでの様子を見る限り、彼らはむしろ場の空気をすばやく読んでいるように思われる。
- (3) 支援者はファシリテーターではあるが、自分自身も活動を楽しむという態度で参加することにより、対等な関係でのコミュニケーションが可能となる。一方で、4名の学生それぞれの、発言はもちろんのこと、非言語的なメッセージもキャッチするように努め、話したい意図や話を聞いているかどうかを感じ取ってそれを表面化するチャンスを作り出している。このことにより、本来コミュニケーションが苦手である学生同士の会話が成り立ち、楽しく和やかな雰囲気の中にも、参加者は集団でのコミュニケーションを実感できたといえる。
- (4) 活動を正確に記録するために、毎回ICレコーダーでの録音をしている。「人前で話せない」「もっとコミュニケーションが上手になりたい」という思いが強い学生が多かったので、「自分の発言を含めて後から見直し、振り返りをしよう」と提案したところ、すぐ



に承諾してくれた。支援者の一方的で指導的な活動ではなく、学生と共に作り上げていく姿勢は、学生が「自分を認めてもらえる」実感につながり、より主体的な学びの場を形成していけると思われる。

<文献>

西村優紀美 (2010) 心理教育的アプローチ. 斎藤清二, 西村優紀美, 吉永崇史 (著) 発達障害学生支援への挑戦—ナラティブ・アプローチとナレッジマネジメント—. 金剛出版, pp 140-201.

